

6月 HUG だより

情報提供者 やましろ小児科 山城武夫

6月のテーマ：危険な虫について



これからの季節は子どもたちにとって肌を出し遊ぶ機会が多くなります。公園の草むら、若葉に潜む虫たち、水辺や田畑の草むらにも虫たちやヘビなどが、海辺には海洋生物（特にクラゲ）などによる被害が増加します。昨今のアウトドア・ブームでは更に多くの危険が存在します。

1. 主な虫刺され

「カ」 人家、公園、野原などどこでも生息しています。刺されると、個人差はありますが、刺された直後から痒みを伴い、赤く腫れます。搔くと更に痒くなり、悪化します。冷やすこと、抗ヒスタミン薬やステロイド外用薬を使用します。



「イエダニ」 主に夜間、布団にもぐりこみ、わき腹や下腹部などから吸血します。痒みの強い丘疹ができ、数日から10日前後続きます。やはり抗ヒスタミン薬、ステロイド外用薬を使用します。イエダニの寄生元はネズミです。その駆除も必要です。

「マダニ」 野山でヒトの皮膚にくっ付き吸血します。くっ付いた時、吸血時には症状がありませんが、日本紅斑熱、ライム病、SFTS（重症熱性血小板減少症候群）などの感染症の病原体を持っています。くっ付いたダニは無理に取らず、皮膚科の先生にかかり除去してもらいましょう

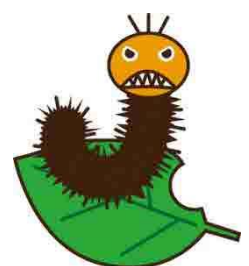
「ハチ」 人家周辺ではアシナガバチ、野山ではスズメバチの被害が多く、夏から秋に攻撃性が強くなります。2回3回と刺されるとアナフィラキシー反応が起こり、場合によってはショックを起こします。アナフィラキシー予防の注射を即座に使用する必要があります。前もってかかりつけ医に相談をしておきましょう。



「ムカデ」 落葉や石の下などに生息し、夜間クモなどを食べに家の中に入ってきます。咬まれると激しい痛みと、赤く腫れます。何回も咬まれるとアナフィラキシーショックを起こします。

「クモ」 外来種のセアカゴケグモに注意しましょう。側溝の蓋の裏などに潜んでいます。ボール拾いは要注意です。

「毛虫」 ツバキやサザンカにつくチャドクガ、サクラやウメにつくイラガの幼虫による被害が多いです。チャドクガの毒のある毛に触れると赤い小さな発疹がたくさんでき、激しい痒みがでます。イラガは鋭い毒棘による激痛があります。こすらず粘着テープなどで付着した毒毛、棘を取り除き、石鹸と流水で洗い流しましょう。





2. 虫以外の有害動物刺咬症

「クラゲ」海水温が上昇する7月下旬～9月にかけて被害が多いです。触手に多い体表にある刺細胞からの毒液で線状の赤いミミズ腫れや水ぶくれが出来ます。直ちに陸に上がり、海水で良く洗いながら（触手は素手で触らない、砂でこすったり、真水で洗うと症状を悪化させる）。ステロイドの外用薬、局所の冷却、鎮痛剤の使用を考えましょう。



©DESIGNALIVE

「ヘビ」日本の在来種の毒ヘビは、マムシ、ハブ、ヤマガラシで、初夏から初秋に多発します。咬まれたら咬傷より心臓に近いところをタオルなどで軽くしぼり、吸引器などで毒を吸い出し、医療機関を受診しましょう。

3. 虫刺されの予防

「カ」などの節足動物による吸血被害を防ぐには、肌の露出を避け（長袖長ズボン、帽子などの使用）市販の虫よけスプレーは副作用の少ない薬剤ですが、6ヵ月未満の乳児には使用できません。6ヵ月以上2歳未満は1日1回、2歳以上12歳未満は1日1～3回の使用で顔には使わないで下さい。ユーカリ油、天然ハーブも虫よけとしてあります。使用方法、取り扱い説明書をよく読んで使用してください。



- *虫よけ剤の効く虫：カ、ブユ、アブ、イエダニ、
- *虫よけ剤の効かない虫：ハチ、アリ、毛虫、ムカデ

